今月のことば　令和3年（2021）12月　<No.184>

「今、会える」浄土

・才市、どこが浄土かい　ここが浄土のなむあみだぶつ

・婆婆と浄土が違うなら　わたしゃ法は聞かんのに
　　わしも婆婆も浄土も阿弥陀もみなひとつ　なむあみだぶつ

上の詩は、江戸末期から昭和初期の時代に生きた浅原才市という有名な妙好人のものです。妙好人とは、お念仏をことのほか喜び、お念仏に生きた在家の方々を指します。才市さんは石見（島根）の船大工でしたが、出稼ぎで真光寺の近所・鞍手郡小竹町あたりに滞在したことがあるとも言われています。

私たち僧侶は、よく浄土のことを「また会える世界」と説きます。これは『仏説阿弥陀経』に出てくる「倶会一処（ともにひとところにて会う）」という一節を基にしているのですが、実は浄土をこのことばだけで表すと、誤解を生んでしまう点があります。

それは、浄土が「**死んでからしか会えない世界**」となってしまう点にあります。亡くなった方と「死んでからしか会えない」のなら、私も早く命を終えていった方が良いのでしょうか？　決してそんなことはないはずです。「**亡き方と今、会いながら・支えられながら、精一杯生きていく**」ことこそが、亡くなっていった方に対する最大の御恩報謝であるはずです。では、親鸞聖人はどうお示しなっているのでしょうか？

『真仏土巻（教行信証）』の冒頭には、こういう言葉があります。

つつしんで真仏土を案ずれば、仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。

「真仏土（阿弥陀如来の浄土）」を考えてみるならば、「不可思議なる光の用（はたらき）」が「真なる如来」であり、「無量なる量りしれない光明の用（はたらき）」が「真土」である、ということです。…ここにおいては、「如来・浄土」がルビーやダイヤで造られたようなすごい世界であるとは決して言われないのです。あくまでも「光明という用（はたらき）」と言われます。

…「今ここでの用（はたらき）が真なる如来・浄土である」ということです。

『親鸞の弥陀身土論　～阿弥陀如来・浄土とは～』渡邊了生　著より

「浄土」とは、死の向こう側にある遠い世界ではなく、**今の私**に届いている「はたらき」であるということです。そうであるならば、**今の私**が阿弥陀如来・浄土の「はたらき」に抱かれていることになります。また、浄土で仏になった亡き方の「はたらき」も、**今の私**に届いていることになります。「死んだ先で会える」だけではない、**「今、会える」浄土**ということを念頭に、もう一度浅原才市さんの詩を読んでみてください。

慧日山　真光寺